

＜日本レジャー・レクリエーション学会第 39 回学会大会
シンポジウム開催趣旨および概説 於：江戸川大学＞

総合テーマ：生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン
－ 架け橋としてのレジャー・レクリエーション－

土屋 薫¹

The way to a sustainable society based on ecological and cultural resources

－ Leisure and recreation studies should go into an alliance with these two resources －

Kaoru Tsuchiya¹

本報告では、まずシンポジウムの開催趣旨について整理しながら全体を概観してみたい。

第 39 回学会大会のテーマである「生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン－架け橋としてのレジャー・レクリエーション－」は、「自然と人の営みの重なるところにわれわれの生活は位置しており、レジャーやレクリエーションこそ、これらのバランスを取る役割を担えるのではないか」という問題意識に支えられたものである（地域研究もこの流れを汲んで企画された。図 1）。



図 1 地域研究：水元公園

そして、このテーマに沿った議論を表層的に終わらせないために、三部構成とした。第一部のセッション A および第二部のセッション B では、

まずメインスピーカーに話題提供していただいたのち、ゲストスピーカーお二人に具体的な事例紹介をしていただき、ついでスピーカー 3 人で意見交換をしていただく、という形を取った。また、その交通整理をしていただくために、それぞれのセッションでテーマに造詣の深いコーディネーターを置くことにした。それを受けて、総括セッションとして、セッション A とセッション B のメインスピーカーを軸としたパネルディスカッションを執り行なうこととした。第一部と第二部は、第三部の議論を活発に進めるための準備体操としての位置づけとを考えていただいてよいだろう。

セッション A は「親水レクリエーション&スポーツ」というサブテーマで、メインスピーカーの庄司邦昭氏（東京海洋大）から「船を通した川とのつきあいかた」というテーマで話題を提供していただき（図 2）、さらにお二人のゲストスピーカーにご登壇いただいた。



図 2 庄司邦昭氏

郡司俊雄氏（江戸川大）は、千葉県流山市から柏市へと流れる大堀川におけるカヌー実習について報告され（図3）、遠藤大哉氏（NPO法人パディ冒険団代表）は、湘南の海で展開されているライフセービングと冒険スクールの報告をされた（図4）。総じて実践の場をつくりあげることの意義と難しさが提示されたと言えよう。

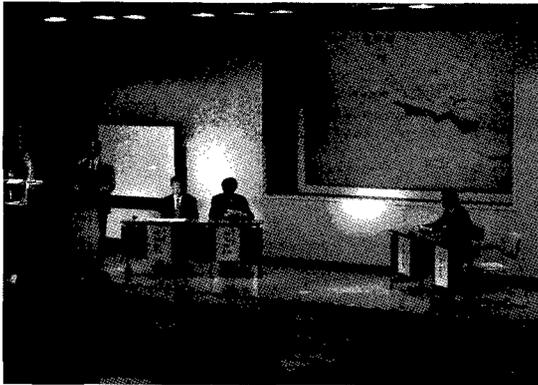


図3 大堀川カヌー実習報告

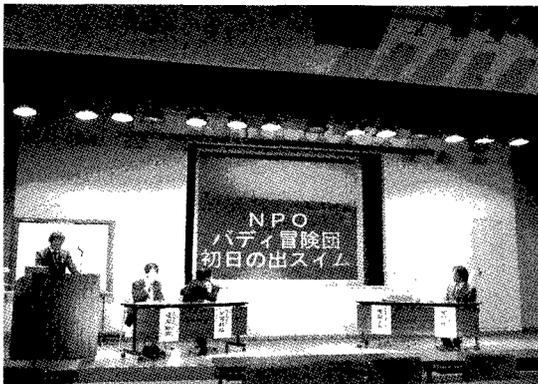


図4 湘南ライフセービング報告

セッションBは「世界の水辺空間&都市開発」というサブテーマで進められた。メインスピーカーの樋口正一郎氏（美術家・都市景観研究家）は「水辺空間の現在 -ソウル・ロンドン・バーミンガム-」と題して、都市開発における水辺空間の重要性について、世界の先進事例を紹介された（図5）。

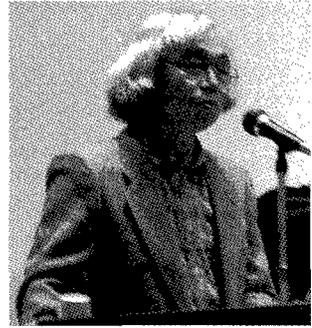


図5 樋口正一郎氏

続くゲストスピーカーの恵良好敏氏（NPO さとやま理事長）は「おたかの森」、新保國弘氏（東葛自然と文化研究所所長）は「利根運河」周辺の魅力と成り立ちについて紹介された（図6、図7）。ここでは、流山市周辺の魅力と地域づくりの核となる資源について、あらためて刮目させられた。

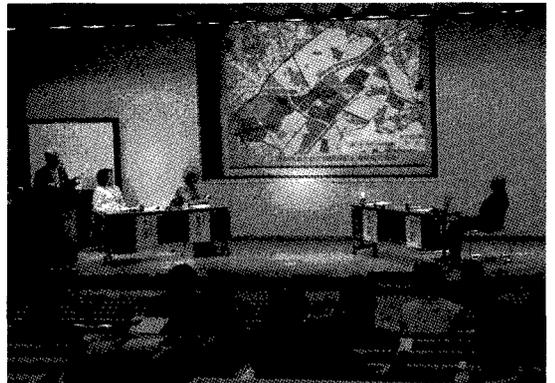


図6 流山おたかの森報告

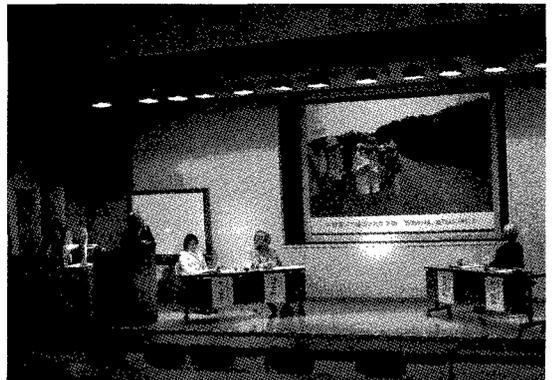


図7 利根運河報告

第三部である総括セッションは、セッションAとセッションBを踏まえた上で、「ひとがリピーターを育み、リピーターがひとを育てる－着地型観光に学ぶ地域の誇り－」というテーマでパネルディスカッションが進められた。

パネリストはセッションAのメインスピーカー庄司邦昭氏とコーディネーター後藤新弥氏(江戸川大)、セッションBのメインスピーカー樋口正一郎氏とコーディネーター恵小百合氏(江戸川大・江戸川大学総合福祉専門学校)、さらに小高静子氏(流山ガーデニングクラブ「花恋人－かれんと－」会長)と井崎義治氏(流山市長)の2名を加えた計6名で、コーディネーターは電通OBで流山市在住の行政コミュニケーションアドバイザーである梅谷秀治氏が務められた(図8)。



図8 総括セッション

議論を進めるにあたって着目した「着地型観光」というキーワードの「着地型」が意味するのは、目的地である地域が中心となって観光商品をプロデュースしていくことである。すなわち、地域住民の関わる体験や交流がベースとなって展開されることをその特徴としている。

流山ガーデニングクラブ「花恋人－かれんと－」は、2005年の設立以来、「オープンガーデン」(自宅庭園の無償公開)を実施してきた。2009年には、5月6日(水)～8日(金)の期間中、のべ6,907名もの来場者があったという(主催者調べ)。会期当日は天候不順が続いたにも関わらず、また顕著な特産品がある訳でもなく、もちろん道の駅のような物販拠点や休憩所、交通

インフラがあるわけでもないのに、平日の3日間でこれだけの人数が来場したことになる。

このことは、「地域資源を生かした交流人口の増大を組み込んだまちづくり」という視座が「豊かさの実現」につながっていく可能性のあることを示している。すなわち、観光はもはや観光産業によってのみマネジメントされるべきものではなく、当該地域に居住する住民の生活および価値観と結びついて成り立つものであることがわかる。

また、第39回学会大会が開かれた江戸川大学の位置する千葉県流山市は、2005年のつくばエクスプレス開業以来、東京都心で生活の糧を得るいわゆる「新住民」の流入が続く地域で、高度経済成長期のわが国の状況を想起させるいわば「運れてきた都市郊外型ベッドタウン」である。

したがって、この地域の「現在」を今回のテーマの視点から検討することは、実は、「ひと＝生活主体」の視点でわが国の戦後史を振り返ることを意味するのではないだろうか。その意味で、戦後わが国のレジャーやレクリエーションが積み残してきたものを検討するよい機会になったと思わ



図9 当日会場

れる(図9)。

最後に、シンポジウムのメインであるところの総括セッションにおける議論の詳細についてお伝えするために、逐語記録を掲載するとともに、AppendixとしてセッションA・Bの当日報告資料を添付するものとする(なお、スライド資料は紙幅の関係上、その多くを割愛せざるを得なかった。深くお詫び申し上げますとともに、ご容赦いただければ幸いです)。